

# 「国宝『寝覚物語絵巻(部分)』の現状模写 及び装潢

博士 前期課程 日本画領域 安井 彩子

## 《原本について》

国宝 紙本著色 26.1×52.6 cm (絵) 26.1×42.8 cm (詞書) 平安時代(12世紀後半) 大和文華館蔵

『寝覚物語絵巻』は11世紀中ごろの王朝物語、菅原孝標女作『夜の寝覚』に材をとる華やかな絵巻であるが、その大部分は失われ、絵・詞書各四段からなる一巻が保存されるのみである。物語は、中の君(寝覚の上)が、姉の婚約者とそうとは知らずに恋に落ち、数奇な運命をたどる内容となっており、現存するこの絵巻は、物語の終末部分にあたりと考えられている。作者、依頼主ともに不明だが、このような物語を題材とした絵画は、貴族の女性たちに好まれる「女絵」として制作された。

絵は、雲母を厚く引いた上から、金銀の裂箔や切箔、砂子を蒔いて装飾された料紙を用いており、その上に絵の具を厚く塗り重ねる、濃彩つくり絵の技法で描かれている。建物を高い視点から俯瞰し、斜線を用いて奥行きを表す「等軸測投影法」の構図や、人物や景物のほか調度にいたるまで細密に描写されている点なども、この時期のつくり絵の特徴である。

詞書は香染め(丁子染め)された黄茶色の染紙に、銀泥と金泥を用いて霞の文様が施され、そのうちの型紙を利用して片側だけぼかしを入れる「片隅ぼかし」は連山を表す。そして、その上から濃淡のあるおおらかな書風のかな文字で書かれている。

## 《打ち紙について》

絵は金銀の料紙装飾と、色彩豊かで繊細な表現が華麗である。それに比べると簡素ではあるが、詞書にも金銀の装飾が施されることで、全体にやわらかく煌びやかな雰囲気漂っている。このような華やかな表現を支える技法の一つとして、「打ち紙」がある。紙を砧で打ちしめることで密度が高められ、にじみを抑えることができ、さらに表面がすべすべとした美しい質感になることで、筆の運びをよくするという効果が得られる。なかでも、雲母引きの紙を打ったものは特に美しく、白く光沢を持った風合いは、濃彩つくり絵をさらに華やかに表現させた。

模写では、さまざまな条件での打ち紙の効果と、それによる性質の違いを検証した上で本紙に応用し、金銀の料紙装飾、絵画表現と順に制作を進め、絵巻制作の再現を試みる。

## 《模写の工程》

さまざまな紙で打ち紙を試し、風合いの良かった溜漉きの小原和紙(二三判200g程度の楮紙)を使用することにした。

### 1. 上げ写し

にじみ止めのドーサが引いてある薄美濃紙を原寸大写真にのせ、紙を上げ下げしながら描き写す。残像を利用して描くことで、手と目で原本の特徴を捉えられ、より充実した情報として読み取ることができる。絵・詞書、ともに行う。



上げ写し



完成した上げ写し(絵)

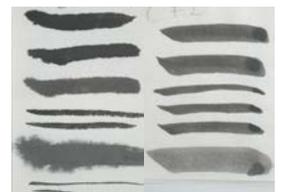
### 2. 基底材の準備

#### ①絵のための打ち紙

原本に雲母が見られたので、打ち紙実験したところ、雲母が繊維の隙間に入り込み、よりにじみが少なくなった。和紙に布海苔(糊)で溶いた雲母をひいた後、一晚湿して繊維を柔らかくし、革に挟んで石盤の上で砧と玄翁で打つ。



雲母と布海苔



生紙と打ち紙した雲母引き紙

#### ②詞書のための打ち紙

原本に雲母は見られないが、染色されていて、変色も進んでいる。そこで、現状の色に近い矢車染料・胡桃染料・墨の混合液で和紙を染めた後、一晚湿して打ち紙する。現状の少しふわふわとした風合いになったところで打つのをやめ、裏からドーサを一回引いてにじみ止めをする。



砧での打ち紙



染色による色の違い

### 3. 線描き・彩色

#### 【絵の工程】

- ① 念紙による転写の跡を避けるため、トレース台に上げ写しと本紙を重ねてのせ、下からの照明で上げ写しを透かし見て墨線をかく。その後、矢車染料・胡桃染料の混合液を全体にかけて古びた雰囲気をつくる。
- ② 銀泥のぼかしを入れ、金の裂箔・切箔、銀の裂箔・切箔・砂子と、段階的に細かな箔で装飾する。銀泥は、アイロンで焼いて色をくすませた銀箔を少量の膠<sup>にかわ</sup>で練ってつくり、切箔は竹刀<sup>ちくとう</sup>で切る。本来、裂箔は無造作な形なのだが、現状に近づけるためカッターで切り出した。
- ③ 実際に原本を見て確認した「色見本」を参考に彩色する。細かな桜や衣の文様は、地色を最初に作ってから描写するなど、仕事の順番に気をつける。箔にも絵の具で古色をつけて、光沢を落ちかせ、全体感をつくる。

#### 【詞書の工程】

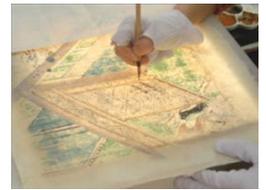
- ① 原本は2枚の料紙が継いであり、それぞれに微妙な変色による違いがある。そこで、原本同様に本紙を2枚に分け、矢車染料・胡桃染料の混合液でそれぞれに古色をつけた。
- ② 銀泥・金泥で霞のぼかし文様をいれる。片隅ぼかしはマスキングテープを利用して斜めに入れる。
- ③ トレース台を使って墨の濃淡に気をつけながら清書する。かな文字は現在と異なるものが多いので、調べておくとなつ一つの文字を理解でき、筆の運びが自然になる。

### 4. 装潢

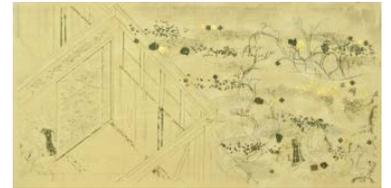
- ① 本紙と裂<sup>きれ</sup>それぞれに薄美濃紙で肌裏打ちをし、仮張り板に張り込む。詞書の裏打ち紙には、本紙に古色の深みが出るよう、墨で染色したものを使った。裂は、細密な作品が引き立つよう、無地を選んだ。
- ② 額装パネルの両面に、和紙を何枚もずらしながら貼る「うけ張り」をする。うけ張りにはクッションのような役割がある。その上から、裏には色紙を、表には裂を貼った。
- ③ 本紙を原寸で断ち切り、表の裂の上から貼る。詞書は本紙2枚それぞれ断ち切り、隙間がないよう貼る。乾いた後、縁<sup>ふち</sup>（桜の白木）にはめ込み、完成とする。



切箔(上)  
裂箔(下)



トレース台での転写



箔による装飾



彩色途中



銀泥を作る



片隅ぼかし



肌裏打ち



うけ張り



本紙を貼る

#### 《総括》

絵巻物自体はそれほど大きくはないものだが、そのなかに多くの工夫を凝らしていることが、制作を通してよくわかった。詞書料紙の装飾文様が、料紙ごとに自由で、繋がりが無いのに対し、絵のほうは構図が決まってから金銀の装飾が施されたであろう点は興味深い。また、木の幹に生える苔・障子の文様などが一つずつ細かく描かれていて、特に、桜は型を使ったかのように均一なのだが、よく見ると花びらの形に僅かな違いがあり、他と同様に丁寧に描かれている点には驚いた。

打ち紙による効果は想像以上であった。絵の具をのせた感じは、雁皮紙のような滑らかさと、楮紙本来の柔らかさを兼ね備えた使い心地であったし、また見た目も別の原料のようで、和紙のもうひとつの面が見られた。

画中の満開の桜には散って描かれるものもあり、自然を美しく描きながらも主人公の行く末を暗示させる。それは料紙装飾との相乗効果により、一層の儂い美しさを感じさせるようで、耽美的であるだけに留まらない美意識を感じた。